

1. 略歴

1983年3月	東京大学文学部国文学専修課程卒業
1983年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程入学
1986年3月	同 修了
1986年4月	東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程博士課程進学
1990年3月	同 単位取得退学
1990年4月	帝塚山学院大学文学部専任講師
1994年4月	帝塚山学院大学文学部助教授
1995年4月	東京女子大学文理学部助教授
2003年4月	東京女子大学文理学部教授
2007年12月	東京大学大学院人文科学研究科 国語国文学専門課程 博士（文学）学位取得
2009年4月	東京女子大学現代教養学部教授（改組による学部名変更）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

日本上代文学・和歌文学

b 研究課題

上代（奈良時代以前）日本文学を、韻文中心に研究している。特に『万葉集』の歌人、柿本人麻呂や、大伴家持の作品について、その読み直しを課題としている。『万葉集』の和歌は、中国の先進文明に正面から向き合って成立した日本という国家における草創期の文芸であり、漢詩文の表現に対して、学びつつ対抗するという両義的な関係を結んでいる。それゆえ、当時伝来していた六朝・初唐の漢詩文との比較・対照を主たる研究方法として、和歌独自の表現を明らかにしつつ、その価値を見出すことを論文執筆の際の、目標としている。更に『万葉集』は、7世紀前半から、8世紀中ごろまでの和歌の歴史を語る書物であると考えられ、歌人たちの積み重ねた作品群がいかなる軌跡を描くか、すなわち『万葉集』の和歌史を明らかにすることを、研究全体の目標とする。

c 概要と自己評価

この一、二年の業績も、それ以前から引き続いて、大伴家持の作品、特に『万葉集』巻十七以降の「歌日誌」の歌において、古代政治史上の事象がいかに関連しているかを俎上に乗せている。特にこの期間は、『万葉集』を締めくくる巻二十の歌々がどのようなことを語っているかを明らかにした上で、巻二十の持つ意義を明らかにする仕事に取り組んだ。今後は、『万葉集』全体の中で、「歌日誌」の持つ意味を体系的に明らかにしたいと考えている。

一方、家持の父である大伴旅人の伝記を書くことがもう一つの仕事であり、これはほぼこの期間に完成させることが出来、出版に付されることになっている。

d 主要業績

(1) 論文

「雪と雷一家持「歌日誌」の韜晦」、『上代文学』120号、2018.4、P31-46

「年初の雪は吉兆か」、『井手至博士追悼萬葉語文研究特別集』、和泉書院、2018.5、P201-222

「大伴家持は『万葉集』の完成にどう関わったのか」、『古典文学の常識を疑うII』、勉誠出版、2019.9、P26-29

『萬葉集』巻二十試論、『萬葉集研究』第39集、塙書房、2019.11、P345-388

「「沖つ藻の花さきたらば」考—人麻呂歌集「略体歌」の「羈旅作」—」、『国語と国文学』第97巻2号、2020.2、P18-

32

3. 主な社会活動

(1) 他機関での講義等

東京女子大学非常勤講師、2013.4～2019.3、2019.3～現在 2018.4～2019.3

お茶の水女子大学非常勤講師、2018.4～2019.3

(2) 学会

萬葉学会 編輯委員

上代文学会 常任理事

(3) 学外組織

大学改革支援・学位授与機構 国語・国文学部会専門委員
高岡市万葉歴史館評議員